

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

On the Formation of the Middle Horizon in the Central Andes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 龍彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004637

中央アンデス Middle Horizon の成立について

藤 井 龍 彦*

On the Formation of the Middle Horizon in the Central Andes

Tatsuhiko Fujii

The study of the Middle Horizon has been one of the major objects of andean archaeology since Uhle's excavations at Pachacamac in 1896. Up to now through the investigations of W.C. Bennett at Hurai, C. Ponce Sangines at Tiahuanaco, L.G. Lumbreras in Ayacucho region, and especially by the analytical study of pottery styles by D. Menzel, the relative chronology and the cultural development of the two centers of this period, southern Titicaca and the Ayacucho regions, has been fairly well established. Although we cannot say that the present data are fully sufficient, I think that it is time to take up the problem of the development process of this important period. In this paper I focus on the formation of the Middle Horizon based on the reports and studies by the investigators mentioned above. Since our data are still somewhat inadequate, perhaps it is still too early to present a complete explanation of this problem. However, this paper is an attempt to advance some tentative hypotheses concerning this problem.

In the Early Intermediate Period, especially in the first half, both southern Titicaca and the Ayacucho regions were culturally underdeveloped compared with other coastal regions. But in the last half of that period we saw the emergence of some political unity, such as Tiahuanaco in the southern Titicaca and Nawimpukyo and Chakipampa in Ayacucho. Of these, Tiahuanaco developed earlier than the others and also showed strong religious characteristics. There large constructions were built and monolithic sculptures were carved. Since E.I.P. these two regions had contact with south coast of Peru, indicated by the polychrome pottery motifs and technique. These contacts were probably through trade activities. From the highland they brought alpaca wool, which was in demand by coastal weavers, and perhaps dried llama meat. The present center of

* 国立民族学博物館第4研究部

herding these animals is the southern highland and it was possibly the same at that time. At present we have no data concerning the materials they brought back from the coast. Other than maize, I can only suggest scallop shells, which are presently an important ritual object among the highland peoples. But it is very possible that Tiahuanaco religious iconography and ideology were introduced from coast through these trading activities. Both the Gateway God and the running figure, as well as feline and eagle or falcon motifs are found in Paracas and Nazca pottery or textile designs although this introduction would have been through Pucara culture. The trade route between southern Titicaca and south coast might have passed through or near the Ayacucho region where at the end of E.I.P. some local political unity was consolidated. It is strange that we do not find any religious traces there. The Tiahuanaco influence appeared suddenly at Conchopata. If the trade route passed near or through Ayacucho, they should have been introduced to the Tiahuanaco religion earlier. Therefore, either the route did not pass through this region, or Ayacucho people were not advanced enough to adopt the Tiahuanaco religion. It is difficult to present a definitive answer but the latter of these possibilities seems the more likely. First the Ayacucho region would have been only a junction spot between southern Titicaca and the south coast, but after the introduction of Tiahuanaco religion, they began to develop culturally and politically. Then they took over trading activities between highland and coast from the Tiahuanaco people. Their capital, Huari, developed based on trading and more systematic exploitation of land and water, and became the center of the Middle Horizon.

- | | |
|------------------------------|-------------------------------|
| I. はじめに | 2. Tiahuanaco の北への進出 |
| II. Middle Horizon について | 3. Art style の持つ意味 |
| III. Titicaca 湖周辺 | 4. Ayacucho 地域の E.I.P. の状況 |
| IV. Ayacucho 周辺 | 5. Tiahuanaco と Ayacucho との關係 |
| V. Middle Horizon の成立過程 | |
| 1. E.I.P. の Tiahuanaco 文化の状況 | |

I. はじめに

中央アンデスの先スペイン文化は、最近の調査の結果紀元前20,000年にまで遡ることが明らかになった [MacNEISH, 1971]。しかし、文明形成の基本的条件である定住、農耕が開始されたのは、ずっと遅く紀元前2,000年頃と推定されている。紀元前2,000年以降、1534年のインカ帝国滅亡までの3,500年にわたるこの地域の文化史をみると、

一つの特徴が浮びあがってくる。つまり、Bennett のいう Peruvian Co-tradition [BENNETT, 1948], あるいは Willey の Peruvian Tradition [WILLEY, 1971 : p. 88, 491] に規定された中央アンデス文化伝統の枠内で、変化に富んだ地方文化が併立していた時期と、この地帯のかなりの部分あるいはその全域を覆う汎中央アンデス文化ともいえるものが現れた時期とが交互に出現するというパターンである。いいかえれば、中央アンデス文化が多様化した時期と、何らかの意味での統一性を持った時期が反復された形をとっているともいえるであろう。

アメリカ考古学では、このように広い地域に急激に広がった文化現象を、Horizonという言葉で表している [WILLEY & PHILLIPS, 1958 : p. 33]。この現象は通常、土器、織物、石彫、金属器などに施された文様により認められ、この文様様式を Horizon Style とよんでいる [WILLEY & PHILLIPS, 1958 : p. 32]。中央アンデスではこの Horizon が3つ認められている。最初は、前900年頃に始まる Chavín 文化の広がりであり、2番目は、600年頃形成されたいわゆる Tiahuanaco Horizon、最後は、征服直前に中央アンデスのみならず、北はエクアドルとコロンビアの国境付近から、南はチリ中部にまで及んだ Inca Horizon である。Horizon という概念は、上述のように広い地域を覆い、かつ急激に広まった文化現象を指すため、広大で多様性に富んだ地方文化を持つ中央アンデスにおいて、異なった地域間の編年を関係づけるものとして、きわめて有用なものである。1956年に Rowe により提唱された、中央アンデス先スペイン文化の時代区分法は、この概念を利用したもので、上記3つの Horizon を Early, Middle, Late とし、紀元前1,800年頃の土器出現以降 Early Horizon (以下本文中では E.H. とする) までを Initial Period (I.P.), E.H. と Middle Horizon (M.H.) の間を Early Intermediate Period (E.I.P.), M.H. と Late Horizon (L.H.) の間を Late Intermediate Period (L.I.P.) とし、従来の発展段階的時代区分法に代えようというものである [Rowe, 1960]¹⁾。

ところで、これら6つの時代のうち、I.P. と E.H. の研究は、この時期が別名形成期ともよばれるように、定住、農耕生活が確立した中央アンデス先スペイン文化形成の時期であるため、多くの学者の調査、研究の対象になっている。また、E.I.P. は地方文化併存期で、一つ一つの文化の広がりが比較的狭いこと、各地できわめて美しくかつ特徴のある土器や織物などが盛んに作られた時期であることなどの理由により、主として型式学的な面ではあるがかなり研究が進んでおり、L.H. の Inca 文明

1) Initial Period は、中央アンデスに土器が出現して以来(紀元前1,800年頃) E.H. 開始までの時期を指す。現在はこの時代区分に、Lanning により6期の先土器時代が加えられた方法 [LANNING 1967 : p. 25] が、多くのアンデス研究家により用いられている。

は征服後の記録も多く、これらの文献に基づいたかなり詳しい研究が行われている。しかし、M.H. および L.I.P. に関しては、従来あまり調査、研究の力が注がれなかった。この原因としては、M.H. 以降、中央アンデスは都市形成の段階に入り、遺跡の規模が大きくなったがそれに見合うような大規模な調査がなかなか行われないこと。M.H. の中心地の一つである Tiahuanaco (Tiwanaku) 遺跡がボリビアにあり、ペルー側の遺跡との共通の問題意識に沿った調査が行われにくいこと。M.H. の広がりがありにも広く、その結果遺跡の数も多く十分な調査が行われないこと。L.I.P. の遺物は、前代のものに比べ大量生産された質的に低いものが多く、研究者の興味をあまり引かなかったことなどがあげられよう。

以上のような一定の条件はあるが、本論でとりあげる M.H. の研究は全然行われなかったわけではなく、むしろ古くから中央アンデス先スペイン文化史の大きな問題としてとらえられていた。M.H. の3つの中心地である Tiahuanaco, Huari (Wari), Pachacamac の3遺跡はいずれも征服直後の記録の中に登場し、古くから知られていた。また、科学的なアンデス考古学の確立者ともいべき Uhle が、Pachacamac 遺跡の調査を行った時、出土した土器や織物に高原の Tiahuanaco の石彫の文様が施されていることに注目し、これを Horizon という概念でとらえた時から追求されて来た問題である [UHLE, 1903]。1948年に出版された *A Reappraisal of Peruvian Archaeology* の中でも、Kroeber の出版した10の問題の一つとして「ペルー海岸地方および高原地方における Tiahuanaco 文化の影響の性格について」としてとりあげられている [BENNETT (ed), 1948 : p. v]。1650年代以降、各地域の調査が進むにつれて M.H. に関するデータも増加したが、特に Bennett による Huari の発掘 [BENNETT, 1953], Strong による南海岸の調査 [STRONG, 1957], Lumbreras を中心としたペルーの学者による Ayacucho 周辺の精力的な調査 [LUMBRERAS, 1956, 1959, 1960, 1974b], Ravines の中部高地の調査 [RAVINES, 1969] などの他、Menzel による M.H. の土器型式の研究 [MENZEL, 1958, 1946] も進み、M.H. 各地域の様相が次第に明らかになりつつある。また、近年ボリビアの学者による Tiahuanaco 遺跡の大規模な発掘調査が進行しつつあり、報告書もいくつか出版され [PONCE SANGINÉS, 1961, 1969, 1970a, 1970b, 1971a, 1971b]、今後も新しいデータが報告されると思われるので、E.H. から M.H. にまでわたるこの大遺跡を中心とした Tiahuanaco 文化の研究も進み、それと共に M.H. 研究にも大きな進展が予想される。

次に M.H. 研究の意義についてであるが、第1に、中央アンデス先スペイン文化史上の一時期として、その成立、発展、終焉に経る経過、その内容などの研究は他の

時期同様基本的なものといえる。第2に、この期はペルー北海岸の Chicama 川流域から、南アンデスのチリ北部にまで広がっており（図1）、この期のそれぞれの地域の土器、織物、金属器などの型式、文様を整理、研究することにより、地方文化間の時代的相互関係（cross dating）が可能になること。第3に、この Horizon における Horizon Style の各地域での現れ方を研究することにより、文化の伝播、影響という一般的問題を考える際の非常に良い例となること。第4に、M.H. に入り中央アンデスは本格的な都市形成段階に入ったとされており、都市が文明の一つの指標とするならば、M.H. の形成の研究は中央アンデスにおける文明の形成の研究ともいえるきわめて重要なテーマであること、第5に、Inca 文明という人類史上特異な文明との関連、つまり、Inca 期に完成されたと考えられている国家宗教、広範な領土を治めるため

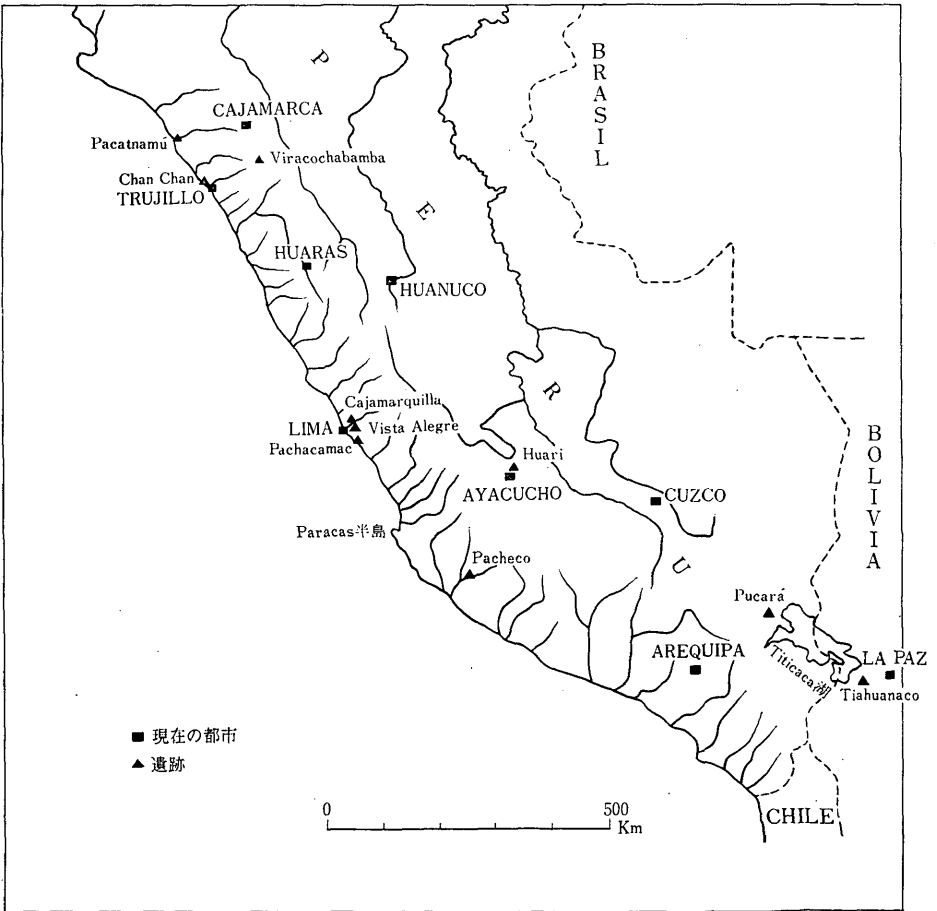


図1 中央アンデス Middle Horizon の主要遺跡

の政治、軍事組織、アイユ (Ayllu) といわれる農村共同体の単位、完備した道路網とそれを利用した交通、通信制度などの、宗教、政治、社会制度の多くはその起源が M.H. にまで遡るのではないかと推定されており [WILLEY, 1971 : p. 164] [MEGGERS, 1972, p. 85] [LUMBRERAS, 1974a : p. 62], このことを確認するのも大きな課題の一つである。

さて、本論では以上のような意義、問題点を踏まえて M.H. 研究の一環としてその成立の問題をとりあげるわけであるが、筆者は Tiahuanaco, Huari, Pachacanac その他いくつかの M.H. の遺跡を訪れたことはあるが、実際にこの期の遺跡の発掘調査を行った経過はなく、また遺物を扱ったこともないので、以下に取り上げるデータは今までに発表された調査報告や、土器を主とした型式学的研究などの文献資料を基にしたもので、いわば中央アンデス先スペイン文明史概説の一章といったものである。ただ、従来の研究はデータ不足という事情はあったであろうが、土器、石彫、織物などの型式の比較研究および cross dating を目的としたものが主であり、文化の形成、発展の経過を問題としたものはほとんど見られないので、その面からの M.H. 研究へのアプローチという形で論を進めて行く。しかし、あくまでも現時点での少ないデータを基にしたものであり、将来調査が進めば全く異なった結論が出てくることは充分あり得るという意味で、研究の一つのステップあるいは一種の問題提起といっても良いかもしれない。

以下、まず M.H. の性格、広がり、内容について述べ、この形成に大きく関係していると考えられる南高地の Titicaca 湖周辺と、中部高地の Ayacucho 周辺地域の E.I.P.後期から M.H. へかけての発展の様相をつかみ、最後にこれらのデータを基にして M.H. 形成の過程についての考察を行う。

II. Middle Horizon について

はじめにも述べたように、紀元600~1,000²⁾年にかけての中央アンデスは、Middle Horizon とよばれる一つの文化的統一性を持った時期であった。この統一性は、主として土器、石彫、織物などの文様として、両手に杖を持つ人物像、“走る人”あるいは“天使”とよばれる羽を持つ横向きの人物像、猫科動物、猛禽類などの動物像が、Horizon style として広く中央アンデス各地に現れてくることにより認められている。これらの文様の多くが、南高地の Tiahuanaco の石彫、土器にみられるものである

2) Middle Horizon の年代については、研究者の間で必ずしも一致していない。Menzel は800~1,100 [MENZEL, 1964 : p. 3], Lumbreras は700~1,100 [LUMBRERAS, 1974a ; p. 151] としている。本論で持った600~1,000という年代は、Lanning [LANNING, 1967 : p. 25] による。

ことは、Uhle の Pachacamac の発掘調査以来知られていた。その後、1920年代に Uhle によるペルー海岸各地の発掘品を整理、研究した Kroeber, Gayton, Strong などにより、同様の文様は中部海岸のみならず、北の Chicama 川から南の Nazca 川流域にまで広がっていることが明らかになり [KROEBER & GAYTON, 1922], 一方、Bennett による北高地の Callejón de Huaylas の調査 [BENNETT, 1944], Rowe 等による中部高地 Huari の調査 [ROWE, COLLIER & WILLEY, 1950] などにより高原地方にも広く分布することが確認された。また、ペルー極南海岸地方 (Chala 川以南) からチリ北部、ボリビア南部の調査が進むにつれ、Titicaca 湖周辺より南へも、その広がりがあった事が知られている。

このように広範囲におよぶ文様スタイルの伝播の中心地として、はじめのうちは Tiahuanaco そのものが比定されていたが、Bennett による Huari の調査の結果、ペルーへの伝播の中心は Huari であったという仮説が提出され [BENNETT, 1953 : p. 117], その後 Lumbreras, Menzel の研究により確認されている [LUMBRERAS, 1960], [MENZEL, 1964]。さらに、Wallace, Lanning による Tiahuanaco と Tiahuanacoille 生と考えられる土器の分析の結果、Pachacamac がもう一つの中心地であることが認められた [ROWE, 1960 : p. 629]。その結果、現在 M.H. を規定する Horizon style は、Tiahuanaco, Huari, Pachacamac の3つの地方型に細分されることが明らかにされている³⁾。

一方、M.H. においてはこのような art style の広がり他に、都市文明の形成という一つの大きな政治、社会的変化があったことが認められている。神殿を中心として、比較的多くの人口が集中した集落は、すでに前代の E. I. P. から出現しており、その後期には支配者の居住区、神殿、倉庫などを備えた都市の萌芽的なものも成立していた。しかし、M.H. のもの、あるいは、M.H. に建造が開始されたとされている、北海岸の Pacatnamú, Chan Chan, 北高地の Viracochabamba, 中部海岸の Cajamarquilla, Vista Alegre, 中部高地の Huari, 南高地の Piquillacta などはその規模も大きく、建物の配置などにかかなりの規則性、計画性が認められる。神殿は引き続き建造されたが、小型になる。この事実は、前代までの宗教的権威を基盤にした支配機構から、世俗的な支配機構への変化を示すものといえよう。

E.I.P. までの中央アンデス文化は、土器、織物、金属器などの作製、石造あるいは日乾レンガの建造物構築など技術的面では、ほぼ L.H. の Inca 文明と同じあるい

3) この3つのうち、Pachacamac は M.H. II期以降に主として中部海岸の中心地となったという点で他の2つとは異なり、M.H. の成立に関しては直接関係ないので本論ではふれない。

はそれを上まわる水準にまで発展していた。食料生産の面でも、海岸の河川流域のオアシス地帯や、高地における灌漑水路、階段畑の構築による耕地の増大、Inca 期に知られていた栽培植物全ての栽培化により、人口はかなり増大していたと推測されている。別名古典期、開花期ともよばれる E.I.P. は、各地に地方色豊かな文化が栄え、中央アンデス先スペイン文化のある意味で絶頂期であった。しかし末期には、人口増大の圧力による領土争いが激しくなり、国土、人心ともかなり疲弊していたのであろう。こうした中で、いわば辺境の Tiahuanaco に起源を持ち、当時の後進地域であった Ayacucho 地方を中心とする広範囲な文化的統一性が形成されたのが M.H. である。

III. Titicaca 湖周辺

この地域は、altiplano または puna とよばれる標高 3,600~4,000m の冷涼な高原盆地で、樹木は繁茂せず広い草原や丘の斜面は、草や灌木に覆われているにすぎない。周辺の山は雪をいただき、そこから冷い風が盆地へ吹下し暴風になることもまれではない。そのため、人間が居住可能な地域は湖の豊富な水によりいく分か気候が和らげられている湖周辺地域に限られている。現在この辺りには Aymara 族とよばれるインディオが、ジャガイモ、ムギ、キノアなどの作物を耕作し、リヤマやアルパカを飼育し、湖の魚を漁って生活している。

現在までに知られているこの地域の E.I.P. および M.H. の遺跡としては、E.I.P. 前期に属する北岸の Pucará と、おそらく E.H. 後期から L.I.P. にかけての Tiahuanaco の大遺跡、および湖中の島や湖南岸に散在するいくつかの M.H. の小神殿遺跡にすぎず、本論で問題となる E.I.P. 後期から M.H. 前期のものとしては、Tiahuanaco がただ一つである。

Tiahuanaco は、湖の南東約 20 km、標高 3,800 m で低い丘陵にはさまれた広い谷間に位置する。この遺跡については16世紀の征服直後から知られており、当時の記録者の一人である Cieza de León は、1550年以前にここを訪れインカ王朝時代にもすでに廃虚であったといわれていると記している [CIEZA DE LEÓN, 1941 (1553): p. 299]。その後、19世紀から20世紀初頭にかけて多くの旅行家、研究者による記録が残されているが、科学的な発掘は1932年 Bennett により初めて行われた [BENNETT, 1934]。その後、Rydén による小規模な調査が行われ [RYDÉN, 1947]、1957年には Ponce Sanginés を中心とするポリビアの考古学者による大規模な計画的発掘が開始され、現在も進行中である。この調査により、すでに約 10,000 m² の範囲が発掘

されたが、総面積 3 km² という大遺跡のためまだほんの一部の調査が終ったにすぎない。中心部は広さ約 0.3 km² で、Acapana とよばれる大きなピラミッド状のマウンド、Qalzasaya、小地下神殿、Puma Puncuなどを主としたいくつかの建造物がみられる。現在までに Qalzasaya、小地下神殿の調査が進み、後者はほぼ完全に、前者も外壁のかなりの部分が復原されている。この両者は、一方が地下式、他方はプラットフォーム状の基壇で中に一段低い中庭を持つという形の違いはあるが、いずれの壁も大きな切石を立て並べ、その間に小さな石をはめ込んで造られているという共通の特徴を持つ。また小地下神殿の壁には、釘状頭像とよばれる石彫が数多くはめ込まれている [PONCE SANGINÉS, 1969a]。Puma Puncu は破壊がひどく原型はわからないが、付近には見事に加工された巨石が散在している。この切石中最大のものは 300 トンを越える。また、これらの石のいくつかには、縁に整然と切り込まれた T 字型の溝がある。これは、2つの石を並べ連続する溝の中に I 字型の銅あるいは青銅製のかすがいを入れて固定したものとされている [PONCE SANGINÉS, 1971a : pl. 105-108]。これらの建造物の他にも、地下式の石室を含む多くの小建造物や、階段、排水溝が発見されている。また従来は知られていなかったが、最近の調査により日乾レンガ造りの建物の痕跡がかなり発見されているし、遺跡の西方では墓地も発見されている。これらの建造物は、それぞれほぼ左右対称の整った形をしているが、全体的な配置、方向性あるいは計画性に関しては、Ponce Sanginés はそれを主張しているが [PONCE SANGINÉS, 1969]、現在知られているデータからは必ずしも明らかではない。

多数の石彫が発見されているのも、この遺跡の特徴である [SCHAEDL, 1948], [POSNANSKY, 1945]。一般に monolith とよばれる柱状の人物像が最も典型的なもので、その他に猫科動物像、前述の釘状頭像、階段、格子文などの幾何文様の彫られた板石などがある。有名なものとして、Qalzasaya の一隅にある門状の一枚石の石彫がある。

この石彫は一般に“太陽の門”とよばれているが(図2)、実際に太陽信仰と関係があったということは確認されていない。これらの石彫のいくつかには、頭帯、胴部、腰帯などの細かい線彫りの文様が刻まれており、これは衣服や装飾品を示すものとされている(図3)。石彫の多くが発掘により出土したものでないため、その用途、時期を決定するのは難しいが、いずれも神像、あるいは神の使者として神殿に祀られていたものや、神殿の壁や入口の装飾に使われていたものと推定されている。時期については、わずかな発掘例や施された文様の比較研究から、“太陽の門”や柱状の石像は M.H. に属するとされている [PONCE SANGINÉS, 1961 : p. 19]。

土器に関しては、ボリビアの学者による層位的発掘の結果、I～V の5つの時期に

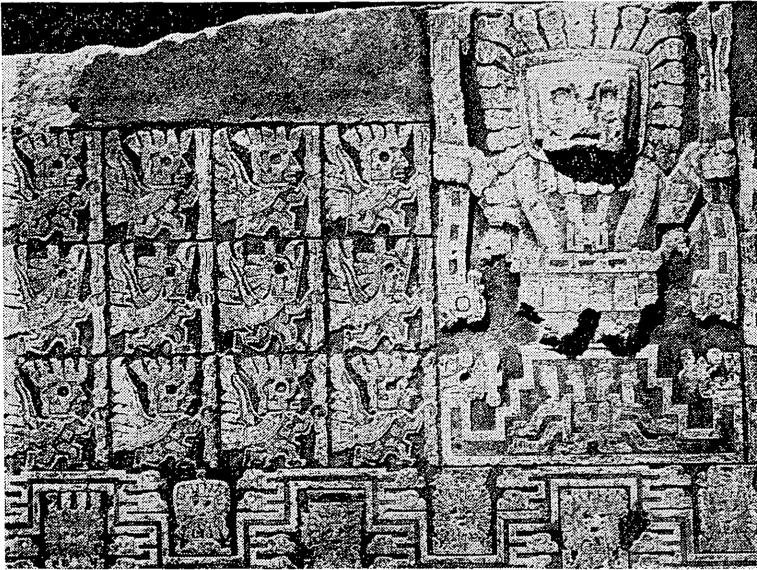


図2 Tiahuanaco “太陽の門” の浮彫り
 【POSNANSKY, 1945 : pl. XLVIII】より

分けられたそれぞれの期の様相がかなり詳しく報告されている。Ⅰ，Ⅱ期は E.H. 後期から E.I.P. にかけての時期で，無文の土器が大部分を占めるが，文様の周囲を刻線で区画した多彩色文土器がみられる [PONCE SANGINÉS, 1971b]。Ⅲ期は E.I.P. で，Bennett により Early Tiahuanaco と名付けられた土器が現れる。鉢，壺が多く，特殊なものとして猫科動物やリヤマを象った香炉型のものがある。文様はやはり多彩色で，比較的幾何文が多いが猫科動物，猛禽類を表したと思われるものもみられる [BENNETT, 1934 : fig. 13, 14]。Ⅳ期は M.H. に属し，従来 Classic Tiahuanaco 式とよばれていたものである。器形は “kero” と名付けられた口のやや開いたコップ状のものが典型的なもので，胴部に人面をレリーフで表したものも知られている [PONCE SANGINÉS, 1948]。その他に器壁の外反した鉢，口縁部が極端に外に張り出した壺，Ⅲ期にもあった動物象型香炉などが主なものである [BENNETT, 1934 : Fig. 12]。この期の土器には，赤または茶色のスリップが施され，器面はきれいに磨かれている。文様は多彩色のものが大部分で，石彫とは異なり比較的単純な猫科動物，猛禽類，人面などが繰り返し描かれ，それに階段文などの幾何文が組合されているのを典型とする [POSNANSKY, 1945]。Ⅴ期は M.H. 後期から L.I.P. 前期にあたる。器形，文様ともⅣ期の継承であるが技術的にも美的にも頹廢したものになる [BENNETT, 1934 : fig. 17]。

その他の遺物としては，土製品，石器，骨角器，金属器，木製品，織物などがある

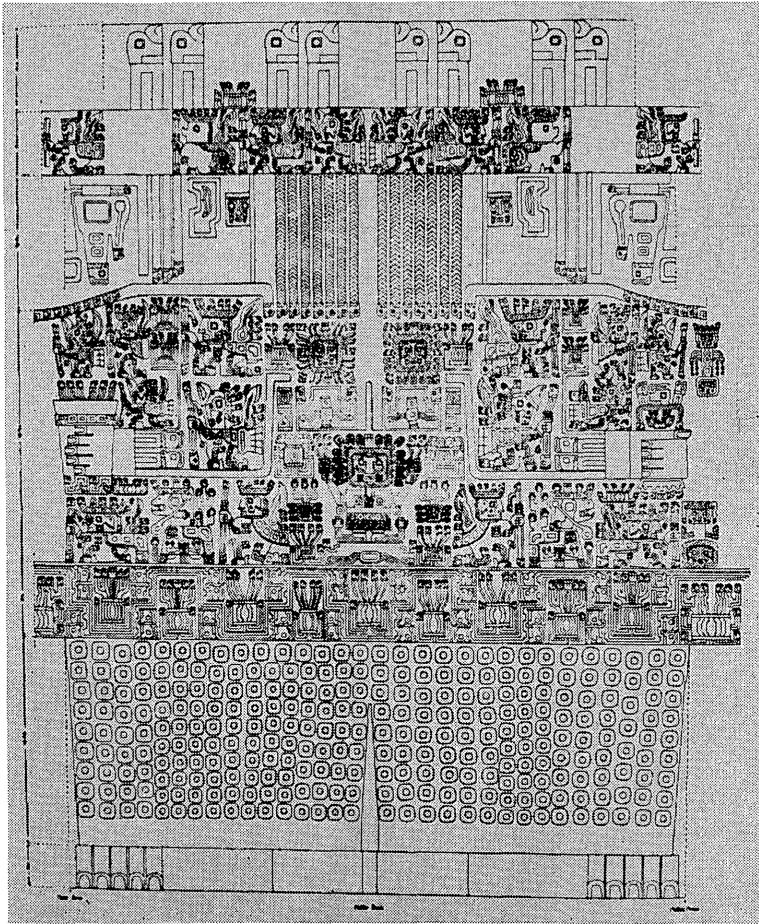


図3 Tiahuanaco 出土石彫の文様展開図
[POSNANSKY, 1945 : fig. 113a] より

が、後の2つに関しては全然遺されていない。しかし、前述のように石彫の表面に刻まれた細かい文様は、織物を表すものと推定されている点から、他の中央アンデス地帯同様かなり高度なものが作られていたことは想像できる。その他の遺物に関しては特に目立った特徴のあるものは報告されていない。この地域は当時金属加工術の発達した所とされている [WILLEY, 1971 : p. 156] が、実際の遺物では前述のかすがいの他には少数の装飾品が知られているにすぎない [PONCE SANGINÉS, 1961 : p. 16], [IBARRA GRASSO, 1973 : p. 193]。

さて、以上のような長い歴史と豊かな内容を持つ Tiahuanaco 文化であるが、その成立から M.H. への発展の経過は次のように考えられる。

初期の I, II 期に関しては、現在土器の外には、数点の金、銀製品が知られているのみで、詳しいことは解明されていない。しかし、この期に関連して問題になるのは、ほぼ同時代に Titicaca 湖北岸に栄えていた Pucará 文化との関係である。Pucará は湖から約 60 km 離れた内陸にある遺跡で、切石造りの神殿と思われる建造物、人物像や石碑状の石彫、多彩色土器の文様の周縁を刻線で区画する技法、猫科動物や杖を持った横向きの人物像 [POSNANSKY, 1945: pl. LVI. B] など、Tiahuanaco 文化と共通する多くの要素を持っている。しかし、Pucará の神殿は馬蹄形のプランを持つという特異な形態のものであり [KIDDER, 1943]、石彫も手にナイフや戦首級を持つ人物像、稲妻や魚または蛇と思われる動物が浮き彫りされた薄い板碑状のもの [SCHAEDEL, 1948: pp. 70-71] など、現在までのところ Tiahuanaco では知られていないものがある点から、Pucará と Tiahuanaco との間には、かなり強いつながりが推定されるが、両者の関係にはまだ未解決の問題が残されている。

このうち、多彩色土器にみられる技法は、南海岸 E.H. の Paracas 文化にも共通してみられる。このことは、おそらく Pucará を通じてではあろうが、初期の Tiahuanaco 文化とペルー南海岸とのつながりを示すものといえよう。Paracas 文化の土器や織物に表された文様をみると、猫科動物が特に多く、また手に杖を持ちあたかも空を飛んでいるような人物像 [KELEMEN, 1969: pl. 175a, 177b]、両手に杖を持った人物像 [MENZEL, ROWE & DAWSON, 1964: fig. 60c] など後に Tiahuanaco で重要な文様要素になったものがみられる。このことから直ちに、Tiahuanaco 文化のアイヌノグラフィあるいは宗教的イデオロギーの Paracas 文化起源と結びつけられるものではないが、一つの重要なデータにはなるであろう。

I, II 期に関してもう一つ注目される点は、当時すでにジャガイモを凍結乾燥させて保存する技術があったと考えられていることである [PONCE SANGINÉS, 1961: p. 61]。ジャガイモの栽培化に関する研究は、資料の制約もあり海岸のトゥモロコシのように進んでいないが、中央アンデス南高地がその原産地であることはほぼ間違いない [田中, 1975: pp. 149-155]。また現在でも高原地帯の食料として重要な地位を占めており、Pucará や Tiahuanaco 文化の成立と、この作物の本格的な栽培化が結びつくということは充分考えられる。

もう一つ、Tiahuanaco ではまだ発見されていないが、Pucará の土器の文様にアルパカと思われる動物の首に紐を巻いて持っている人物像がある [POSNANSKY, 1945: pl. LVI. B]。アルパカやリャマは、現在でも高地の農民の間で豊穡儀礼その他で犠牲として捧げられる重要な動物であり [TSCHOPIC, 1951]、この文様は当時からこれらの

動物が重要視されていたことを示すものであろう。一方、南海岸の Paracas 文化は、美しいマントで有名であるが、これらの織物は木綿地に獣毛——おそらくアルパカ——で刺繍されているものが多い。アルパカは海岸低地では飼育が困難であり、その毛の入手には高原との交易によったということが当然考えられる。距離的にはかなり離れているが、前述の土器にみられる共通点からも、南海岸と Titicaca 地方との間には直接の交易関係があった可能性は高い。

Pucará 文化がいつ頃終わったか明らかではない。しかし、その終焉と Tiahuanaco 文化の発展との間には関連があるであろう。すなわち、Tiahuanaco 文化はⅢ期になると湖の周辺へとその範囲を拡げはじめる。Tiahuanaco では Qalzasaya, Puma Puncu などの神殿と思われる建物が建造され、石彫も作られ始める [PONCE SANGINÉS, 1970a : pp. 11-12]。その背景には当然生産力の向上、人口の増加が伴っていたと考えられる。最近の調査によれば、Titicaca 湖の岸、特にその西岸には幅数 m、長さ 100 m の畝状の耕地と、その間を通る水路が網の目のように広がり、かつては数万 ha の範囲が耕作可能であったことが判明した [PARSONS & DENEVAN, 1967]。これが造成された年代は不明であるが、その開始はⅢ期にまで遡る可能性もあるであろう。また、Pucará 文化の終焉と共に、そこから石工などの技術者が Tiahuanaco へ移って来たということも推測できる。大神殿の建造は、神官を中心とした支配階層の成立を意味し、またその宗教的イデオロギーを具現化するために、神像、神の従者などが、石彫、土器、織物などに表されたことは疑いもない。

Ⅳ期になると Tiahuanaco 文化はますます発展し、Tiahuanaco は神殿を中心とした大宗教センターになった。高原、湖、アンデス東斜面の亜熱帯や熱帯の谷間の 3 つの異なった自然環境の地を結ぶ位置にある Tiahuanaco は、その地理的条件を生かして広大な交易圏を作り、中央アンデス南部における物資、情報のセンターとなり [PARSONS, J. R., 1968 : p. 243]、また周辺の資源を産出する地を統治する政治、社会的中心地として栄えていたと考えられる。

IV. Ayacucho 周辺

Ayacucho 市は、ペルーの首都 Lima 市の南東約 300 km、中央アンデス高原地帯のほぼ中央に位置する (図 1)。市の標高は 2,800 m であるが、周辺には他の中央アンデス先スペイン文化の中心地であった、Cajamarca, Callejón de Huaylas, Huancayo, Cuzco, Titicaca 湖周辺のように、広い盆地は形成されていない。比較的平らな部分には、Ayacucho, Huanta 両市周辺および Amazon 源流の一つである Mantaro 川の

支流 Huarpa 川に沿った狭い部分に限られている。その他は、かなり傾斜の急な丘陵地帯である。この地域のもう一つの特徴は、高度が前述の他の高原盆地よりやや低いため、乾燥度がかなりきついこと。周辺に 4,000 m 近い亜高山地帯から、一番低い谷底の亜熱帯砂漠地帯までにわたる、変化に富んだ植生がみられること [MACNEISH, 1971] である。また、中央アンデス高原地帯では北へ行くほど雨量は増すが、一般的に雨量は10~11月から5月頃までである。しかし、Ayacucho 付近では12月から2月までの3ヶ月にすぎない。雨季にはかなりの降雨がみられ、斜面にある耕地は土砂の流失が激しい。

この地域の先スペイン文化研究は、北海岸の Mochica, 南海岸の Nazca, あるいは高原の Cuzco や Tiahuanaco のように、高度に発展した E.I.P. や L.H. の文化を持たなかったために、かなり遅れていた。ただ、M.H. の大センターである Huari の遺跡は、やはり Cieza de León により「Vinaque という川の傍に大きくて非常に古いと思われる遺跡があり、Inca よりはるか以前に建造されたといわれている」と記録されている [CIEZA DE LEÓN, 1941 (1553) : p. 263]。この地域の科学的な調査は1931年の Tello によるものが最初である。彼は1942年にも Huari と Conchopata の2つの遺跡で発掘を行い、その結果を新聞や学会で報告している [TELLO, 1942]。その後1946年に Rowe 等が Huari の一般調査を行い、表面採集により得られた土器の型式分類を行っている [ROWE, COLLIER & WILLEY, 1950]。1950年には Bennett が Huari で小規模な発掘を行った [BENNETT, 1953]。この調査は、土器型式を層位的につかみ編年をたてることを目的としたものであった。しかし、彼の選んだ15個の pit の多くは層位的に混乱していたにもかかわらず、人工層位に基づいた発掘法のためそれに気付かず、E. I. P. の Huarpa 式土器と、Tiahuanaco の影響のみられる Huari 多彩色土器の前後関係を逆に考えてしまった。後にこの誤りは、Lumbreras と Menzel により指摘されている [LUMBRERAS, 1957], [MENZEL, 1964]。1956年以来、Lumbreras を中心とした調査が開始され、Wichqana, Aqo Wayqo, Conchopata, Huari などの遺跡の発掘が行われた。その後、1970, 71年に MacNeish を団長とする Peabody 財団の Ayacucho Huanta 考古学、植物学調査団により、地理的にも時間的にも広範な調査が実施された。MacNeish の主目的は先土器時代にあったが、この調査の一環として、I.P. 以降の調査が Lumbreras を中心に行われ、約 300 の遺跡が確認された。そのうち Conchopata, Raqay Pampa, Chupas, Tunasniyoq, Wichqana, Lagunillas, Wayllapampa, Ñawimpukyo の8つの遺跡で発掘が行われた。この結果は一部予報の形で報告されているのみ [LUMBRERAS, 1974b] で、将来の本報告と共

に新しい事実が明らかになると思われる。

この地域の先スペイン文化研究の中で重要なものとしてあげられるものに、Menzel による M.H. の土器型式の研究がある。これは、従来とかくあいまいに使われていた土器の型式名を整理し、きちんとした編年関係をつかむことを目的としたものであった [MENZEL, 1964 : pp. 2-3]。この中では同時に、土器型式の変化を通じてとらえられる、M.H. 成立以降の Huari 文化の発展の問題も論じられている。

さて、前述の発掘調査の行われた遺跡のうち、本論に関係するものとしては、E.I.P. の Lagunillas, Ñawimpukyo, E.I.P. から M.H. にかけての Conchopata, Huari, M.H. の Aqo Wayqo, Tunasniyoq がある。Ayacucho 周辺の E.I.P. に関しては、これらの遺跡の発掘が行われるまではあまり詳しい様相はわかっていなかった。ただ Huari その他にみられる白地に赤、黒で主として単純な幾何文様の施された Huarpa 式土器が、この期に属すとされていた。この地域の E.I.P. は、Huarpa 式土器の変化を規準とした A~D の4期に分けられている。しかし、この変化は胎土、器形、文様などに僅かに認められるにすぎず、全体としては粗製の土器といえる [LUMBRERAS, 1974a : figs. 144-146]。Huarpa 式以外の E.I.P. のものとしては、A 期に始まり C 期に多くなる Cruz Pata 式と、D 期に現れる Okros A 式がある。いずれも Huarpa 式派生とされるが、彩文の色、slip、文様などに差が認められる。特に、Cruz Pata 式 C 期以降に現れる円の周囲に放射状に曲線が加えられた文様 [LUMBRERAS, 1974a : fig. 147]、Okros A 式の奇妙な動物か植物を表すとされる曲線文様 [LUMBRERAS, 1974a : fig. 148] などの文様、Cruz Pata 式の頸部に人面をつけた壺などは、南海岸 Nazca 文化との関連を示すものとされている [LUMBRERAS, 1974a : p. 138], [STRONG, 1957 : fig. 15]。

Lagunillas と Ñawimpukyo の調査の結果、土器以外の E.I.P. に関する資料が得られている。Lagunillas は、広大な住居址と想定されているが、現在までにその一画で階段畑の土留めの石壁、いくつかの住居址が調査されているにすぎない。土留めの石壁には、小型の粗い割石を積んだもの、大きな割石を平らに並べたもの、大石を一定の間隔で立て並べ、その間に小石を詰めたものの3種が型式に認められている。しかし、この違いが年代的なものを示すものかどうか未解明である。住居は、山腹に露した岩肌を利用して作られ、一般に円形に近いプランを持っているが、方形のものも知られている。Ñawimpukyo は、Ayacucho 市の南の丘の頂上近くにあり、“泉”を意味する名の通り、近くに泉を湧き出している。ここからは、儀礼の場と思われる基壇、穀物倉、中庭のある方形の住居、広場、灌漑水路などが発見されており、これら

の配置には一定の規則性が見られる。住居の壁は、Lagunillas の土留め壁にもみられた、大石を並べその間に小石を詰めるという方法で作られており、全体のプラン、石壁の造りなどから、ここは当時の支配者階級の居住地で、人口もかなり多く、単なる宗教センターではなく“都市”の発生期の状態を示すものと想定されている [LUMBRERAS, 1974b : p. 105]。

この期のもう一つの特徴は、限られた水をできるだけ有効に使う手段がかなり発達していたことである。Ayacucho 市の南の Qwicapata で、割石で作られ内部を細かい粘土で覆った灌漑水路、小さなダム状の貯水池が発見されている [LUMBRERAS, 1974a : p. 135]。これらの時代的位置づけは明らかではないが、あるいは E.H. にまで遡るかもしれないといわれている。

M.H. は、この地域に Tiahuanaco 文化の影響が現れる時に始まる⁴⁾。この期は Menzel の研究により I～IV 期に分けられ、I、II 期はさらに A、B に細分されている [MENZEL, 1958, 1964]。

IA 期の遺跡は、Conchopata を代表とする。この遺跡は、Ayacucho 市の東に広がる台地上にあり、1942年の Tello の発掘の結果明らかに Tiahuanaco 文化の影響の認められる大型の深鉢が発見された。Conchopata 式とよばれるこの型式の土器は、現在までのところこの遺跡で発見されたものが唯一例である。土器はいずれも完全に破壊されており、1.5m×2m の一連の地下石室の中に埋められていた。復原された土器は、全て平底大型の深鉢で、器壁上部に赤地多彩色の文様が帯状に描かれている。文様は、Tiahuanaco の“太陽の門”に刻まれた浮き彫りの中心神像、天使像 (図4)、その変形で杖を下にし身体を水平にして空中に浮かんでいるような人物像、猫科動物、鳥、人などの要素を持った横向き神話的動物像、および“split face”とよばれる幾何学的な文様 (図5) などからなる [MENZEL, 1964]。

この遺跡はかなりの規模を持ったものであったが、現在は飛行場敷地となりほとんど破壊されてしまっている。最近 Lumbreras により、台地端の一部が発掘され、土器製作所址、墓壇などが発見された [LUMBRERAS, 1974b]。IA 期の土器としては、その他に Chakipampa 式、Okros 式、Black Decorated とよばれる一群の土器がある。Chakipampa 式は、Huarpa 式から発展したもので、器形、文様などに南海

4) Rowe による時代区分は、南海岸 Ica 川流域の資料を規準にし、そこに Chavín, Huari, Inca 文化の影響が認められる時を、E.H., M.H., L.H. の開始期としている [ROWE, 1962]。そのため南海岸以外では時間的にいくらかずれがある。Ayacucho 地域は、Huari 文化の起源の地であり、当然 Ica より早く Huari style がみられる訳で、ここでは Huari style の起源である Tiahuanaco 文化の影響の認められる時点を M.H. の開始期とする。

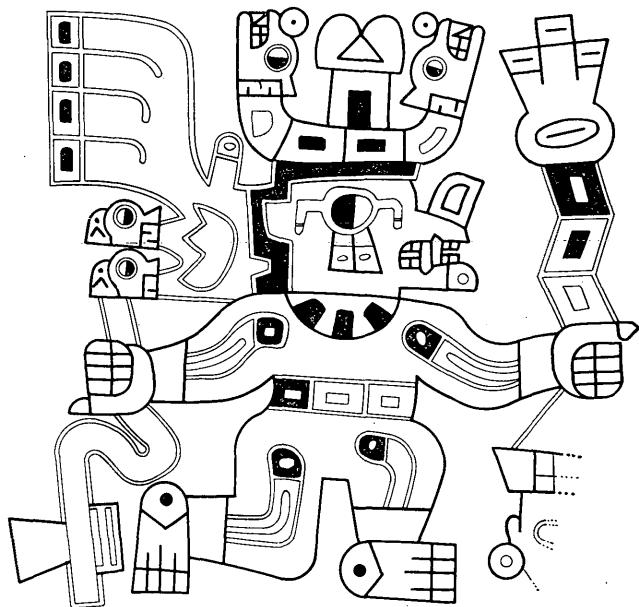


図4 Conchopata 式土器の“Angel”文様
[MENZEL, 1964 ; fig 13] より

岸の Nazca 9 式土器と共通のものがみられる。Okros 式は、E.I.P. 後期から続いているものであり、やはり Nazca 文化の影響が認められる。Black Decorated 式は、Okros 式に似た器形、文様を持つが、黒地に赤と白で施文されている点が異なる。この土器の起源に関しては、今のところ不明とされている [MENZEL, 1964 : p. 4]。

IB 期になると、中心は Ayacucho 市の北約 25 km の Huari に移る。Huari は東西 1.2 km 南北 1.5 km の広大な集落遺跡であり、現在までに何度か調査が行われている。しかし、いずれも一般調査、小ピットによる層位的発掘、建造物の一部の清掃程度のもので、その重要性に比し十分な調査は行われておらず、正確な地図すら作られていない。筆者が 1970 年に訪れた際、Vescelius により遺跡の一画のかなり広い部分の発掘が行われていたが、結果は未報告である。

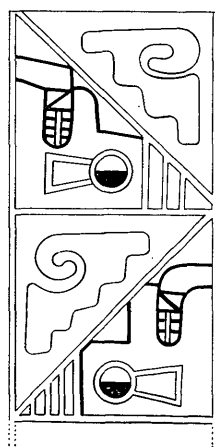


図5 Conchopata 式土器の split face 文様
[MENZEL, 1964 : fig. 12] より

現在までにこの遺跡から採集ないし発掘された土器は、Huarpa 式、Chakipampa 式、Okros 式、Black Decorated 式、Robles Moqo 式、Viñaque 式、Geometric on Light 式などである。このうち、Huarpa 式から Black Decorated 式までは、前述のように E.I.P. または M.H. IA 期に属し、Robles Moqo 式は IB 期に、Viñaque 式と Geometric on Light 式は II 期に属すとされており [MENZEL, 1964]、Huari は III 期にはほとんど放棄されてしまったものと考えられている。

遺跡は、北にゆるく傾斜した台地上にあり、ほぼ全面にわたって石積みの壁がみられる [BENNETT, 1953 : fig. 1]。壁は割石を積んだもので、時には高さ 6 m を越え、長さ 200 m に達するものもある。しかし全体的な計画性は認められない。Vescelius の調査は、このような壁に囲まれた一面を発掘したものである。その結果、区画の中はさらに細かく石壁で区切られ、多くの部屋、通路、小広場などから成っていることが明らかになった。そこからは、粘土を処理する平石、顔料を潰す石製乳鉢——多くに赤色顔料が付着している——などが出土し、土器製作者の居住区と考えられている。周囲の高い壁には入口と思われるものが一つもみられないため、壁の内外におそらく梯子のようなものをかけて出入したと考えられている。その他、壁沿いに板石で作られた地下式の水路が走っていたことも確認されている。遺跡のほぼ中央に、見事に切られた平石で構築された遺構がある。半地下あるいは地下式のこの遺構は、三層になっており各層間は小さな穴でつながっているにすぎない。この遺構は、墓あるいは貯水槽と推定されているが確認されていない。その他、遺跡内でトルコ石の破片が大量にみられる地区、珪石製の小型の石片が散在する地区などがあり、いずれもそれぞれの専門の職人の居住区と考えられている。また、現在は持ち去られてしまったが、元この遺跡にあったといわれる石彫がいくつかある [SCHAEDEL, 1948 : p. 73], [LUMBRERAS, 1974a : fig. 177]。口を大きく開いた猫科動物像一つを除き、残りは全て人物像である。これらは、四角い顔、羽状の頭飾りを持ち、背の低いブロック状をしている。身体の部分には僅かに衣服を示す簡単な加工が施されているのみで、ほとんど装飾は認められない。特異なものとして、石像の背後に人が入れる位の凹みを持ち、そこから口に細い穴のあけられたものがある。これらの石彫については、いずれも原位置から移されているため、時期、用途については不明である。

IB 期に属する Robles Moqo 式土器は、Huari では 6 個の破片が発見されているにすぎない。一方、南海岸では完型品も含めて比較的多くの例が知られており、特に Nazca 川流域の Pacheco からかなりまとまって出土している。しかし、この型式の起源、分布の中心は Huari であったと考えられている [MENZEL, 1964 : p. 21]。

Pacheco 出土の例によれば、Robles Moqo 式は厚手の深鉢、コップ型、頸部に人面を持つ壺、リヤマを象った土器など高さ 30 cm 以上の大型の土器群と、動物形象土器、形象土器とコップ型土器をつないだ双胴壺 [WILLEY, 1971 : fig. 3-9], 人面や手、足を象ったもの [LUMBRERAS, 1974a : fig. 165], 人の顔を表したもの [MUELLE & BLAS, 1938 : Lam. 32, a] などの普通の大きさの土器群とに分かれる。Pacheco では、これらの土器は日乾レンガの地下室から、破片の状態で見つけられている [MENZEL, 1964 : p. 24]。文様は、いずれも赤地に多彩色で描かれたきわめて美しいものである。大型の深鉢には、器壁内外に Tiahuanaco の“太陽の門”の中心神像の文様がみられる (図 6)。Conchopata 式とのちがいは、文様が器面全体に描かれている点の他、トウモロコシ、ハウチワマメ (*Lupinus* spp.) イモの一種 (*Ullucus tuberosus*, *Tropaeolum tuberosus*)、ジャガイモなどがみられることである。これらの植物は、トウモロコシを除きいずれも高地で栽培されているものである。

Ⅱ期の Viñaque 式土器は、前代の Conchopata, Robles Moqo 式にみられた Tiahuanaco 起源の神話的文様が主で、そこに Chakipampa 式にみられる Nazca 的要素が融合したものである。文様の分析によれば、ⅡA 期にはまだ Tiahuanaco の要素

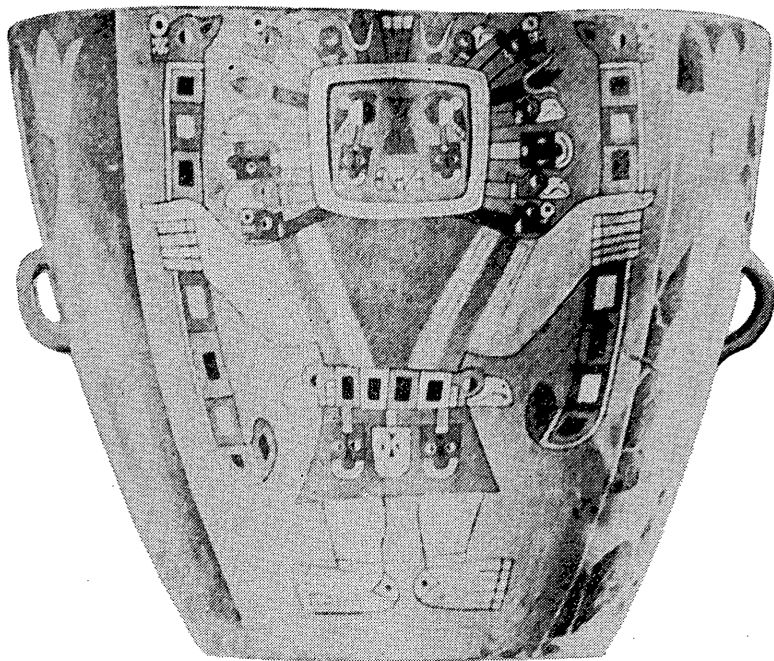


図 6 Pacheco 出土の大型深鉢
[BENNETT & BIRD, 1960 : Fig. 40] より

の新しい流入がみられ、両者の間には何らかの関係があったとされている [MENZEL, 1964 : p. 35]。Geometric on Light 式は、白色の胎土に黒、赤で幾何文様の施されたもので、北高地の Cajamarca III 式、あるいは Callejón de Huaylas の土器との関係が指摘されている [MENZEL, 1964 : p. 45]。

その他の遺物としては、Bennett の発掘により、銅製の留めピン、針、骨製の錐やへら、石製のビーズ、黒曜石の小型打製石器、棍棒頭、石鉢、土製の匙、紡錘車、笛と思われる筒、土偶などが知られているにすぎない [BENNETT, 1953 : pp. 70-71]。

E.I.P. から M.H. 前半にかけての Ayacucho 周辺の文化の発展に関する資料は以上である。E.I.P. のこの地域は、海岸地方の Mochica, Lima, Nazca 文化が、強大な宗教的権威に基づき、いくつかの海岸河谷のオアシスを統合した支配機構を形成し、美しい土器、織物、壮大なピラミッドなどを作っていたのに比べ、その文化程度はかなり低かった。しかし、その中で二つの点が重要なものとして指摘できる。一つは、雨季が短くまた急傾斜地が多いという、この地域の悪条件を克服するために、大規模な階段畑、灌漑水路網を作り上げたという、農耕水利面での技術的発達である。このような大規模な作業は、小さな村落共同体レベルでは不可能なことであり、当然その背後には、この地域を広範に支配し得た政治権力の存在が考えられる。これがいつ頃成立したかに関する明確な資料は、現在までのところ得られていない。しかし、Ñawimpukyo の集落遺跡が、支配者階級の居住地であったとすれば、遅くとも E.I.P. 後半には成立していたと考えられよう。もう一つは、南海岸地方との接触である。E.I.P. の南海岸の文化である Nazca 文化は、後半には前半のような華ばなしさはなく頽廢化を示してはいたが、Ayacucho 地域よりはるかに進んだ政治、社会組織と技術を持っていた。ところが、このように発展した Nazca 文化の影響の明らかなものとしては、僅かに Cruz Pata 式、Okros 式土器の文様しかないというのは、一つの問題点である。

M.H. の開始を示す Conchopa 式土器は、全く突然にこの地域に現れる。この土器は、大きさ、器形、文様などの点から明らかに渡来したのではなく、Ayacucho 地域で作られたものである。またその出土状態もきわめて特殊なもので、そこから想定されるこの土器の持つ意味も、大きな問題点の一つである。M. H. になると、Ayacucho 周辺には Conchopata, Huari, Chakipampa などの大集落が成立する。Tiahuanaco 文化との関係は、土器の文様を通じて I 期から II A 期まで継続的に認められるが、II B 期には断絶する。一方、南海岸との関係は時代と共にますます強くなり、II B 期にはそれまでの海岸から高地へという関係が逆転し、Pacheco のような明らか

に高地起源の遺跡が海岸に現れる。Nazca 文化の影響の下に高地で発展した Chakipampa 式土器も、I B 期には逆に Nazca の土器に影響を与えるようになる。Huari の大集落は Ayacucho 地域の中心地としてますます発展し、多くの専門職人集団をかかえた大都市になり、その頃からいわゆる“Huari 帝国”の中心として、広く中央アンデスの他地域に影響を与え始めたのであろう。

V. Middle Horizon の成立過程

M.H. の成立の問題に大きく関係している、Titicaca 湖および Ayacucho 周辺の文化の、E.I.P. から M.H. にかけての発展経過は以上のとおりである。2 章ですでに述べたように、M.H. を規定する art style の起源は Tiahuanaco 文化に、ペルー各地への広がりを中心は Huari に求められることは、現在までの研究の結果明らかにされている。そこで、本論の問題点としては、art style が送り手である Tiahuanaco から、受け手である Ayacucho 地域へどのように伝わったか、またそれにより示される意味は何かということがあげられる。以下、これを整理し、1) E.I.P. の Tiahuanaco 文化の状況、2) Tiahuanaco 文化の北への進出、3) art style の持つ意味、4) Ayacucho 地域の E.I.P. の状況、5) 両地の関係という 5 つに分けて述べて行く。

1. E.I.P. の Tiahuanaco 文化の状況

E.I.P. 前期の Tiahuanaco 文化は、Titicaca 盆地南部の一地方文化にすぎなかった。当時北部には Pucará 文化が栄えていた。この二つの文化は、対立抗争関係というよりは、むしろ Tiahuanaco 文化は Pucará 文化の影響下にあった。しかし、E.I.P. 後期に Pucará 文化が滅びると共に、Tiahuanaco 文化はその勢力を拡大した。湖の漁撈、ジャガイモその他のイモ類、キヌアなど高地性の栽培植物を基盤にした食料生産も向上したであろう。その結果、人口は増大し、余剰生産物が増加すると共に、非生産階級である神官、役人、専門職人層なども成立し、神殿を中心とした都市的集落が形成され、E.I.P. 終末期にはかなり発展していたと思われる。神殿を中心とした宗教センターは、信仰の中心地であることはもちろんであるが、通常物資の交易センターでもありそれに伴って各地から集って来る人びとによる情報の交換センターにもなる。当時の支配者はこの機能を利用してより強力な地位を築き、Titicaca 盆地を越えた広範囲な文化圏を作り上げていた。

2. Tiahuanaco の北への進出

Tiahuanaco 文化は、その成立の頃から南海岸とのつながりを持っていた。初期は

おそらく Pucará 文化を通じての間接的なものであったが、Pucará 文化滅亡後は直接の関係を持つようになったのであろう。現在のところ、Tiahuanaco からこれを示す直接の証拠は発見されていない。高地と海岸との交易関係は、中央アンデスではかなり古くからみられる。例えば、北高地の Kotosh では、前1,000年頃に海産の貝が出土している [IZUMI & TERADA, 1972 : p. 308]。Tiahuanaco 文化の中心地である Titicaca 盆地は、標高 3,500 m を越える高地であるため、トウモロコシ、ワタ、コカ、タバコなどの栽培はできない。この地域から最も近い栽培不能地としては、東のアンデス斜面の谷があるが、これらの谷はいずれも狭く、深いため充分な耕地はとれない。そこで、これらの資源を求めて必要的にペルー海岸地方へ向ったのであろう。Titicaca 盆地から近いペルー極南海岸地方は、当時文化的に未発達之地であった。また海岸は砂漠に覆われており交易ルートとしては使えないため、高地をまず北へ上りその後谷沿いに海岸へ降りる途をとったのであろう。この高原から南海岸への分岐点、まさに Ayacucho 地域であったと思われる。L.H. の有名な Inca の王道も、Cuzco を発して北上し、Ayacucho 市近くの Vilcashuamán を経て Pisco 川沿いに海岸へ出る途を通っている [LUMBRERAS, 1974a : fig. 218]。海岸との交易で一つの傍証になるのは、現在この地に居住している Aymara 族が各種の儀礼、呪い、治療などの際に、必ず貝を使うということがある [TSCHOPIK, 1951 : p. 240]。貝は主として帆立貝 (*Pecten* sp.) であるが、他の二枚貝、巻貝も使われている。彼等の間では、「貝は護符のように聖なるものであり、海から来るため力を持つ」とされている [TSCHOPIK, 1951 : p. 241]。Tiahuanaco 文化の担い手が、Aymara 族であったという確証はない。むしろ、彼等は L.I.P. にこの地にやって来たグループで、Tiahuanaco 文化の破壊者であるという仮説 [OSBORNE, 1968 : pp. 76-82] もあり、必ずしも簡単に結びつけるわけには行かないかもしれない。しかし、海岸と高地を結ぶ一つの資料として、将来の検討が必要であろう。

Tiahuanaco から海岸へは、前述のように低地の栽培植物、海産物を求めてと考えられるが、高地から海岸への交易品としては、アルパカ、リヤマなどの毛、肉が重要なものと考えられる。これらの動物は高地でしか飼育できない。その毛は E.H. の Paracas 文化の織物にも使われており、また肉は乾肉として現在でも高地住民の重要な蛋白源となっている。現在の中央アンデスは、アルパカ、リヤマの飼育は、中部の Cerro de Pasco 付近を北限とするが、その中心地は Cuzco 以南の南高地で現状を過去にそのまま当てはめるのは危険であるが、この事実は生態学的条件によるものと思われるので、E.I.P. 以降現在までこの条件の変化はなかったとされている以上、当

時の状態を推測する一つの資料になり得るであろう。とすれば、E.I.P 後期にこの地域を支配下に収めた Tiahuanaco 文化は、中央アンデスの重要な資源の一つであるこれらの動物を、交易品として十分に活用したものと考えてよいであろう。

3. Art style の持つ意味

M. H. に中央アンデスに広がった art style は、Tiahuanaco の石彫に刻まれた文様を主とする。中でも“太陽の門”の中心神像とその従者が最も重要視されていた。この神像がどのような神格を表したのか全く不明である。両手に杖を持ち、口に牙のある神像は、E.H. の Chavín 文化に現れ、それが Paracas 文化、Pucará 文化を経由して、Tiahuanaco 文化に伝わったものとも考えられる。しかし仮にそうだとしても、祖型である Chavín 文化の神の性格が未解明である現在、残念ながら判断の資料にはならない。眼の下に施された文様を、涙を表すものとし水神あるいは雨神であるとも推測されている。あるいは、Aymara 族の伝説の中に登場する、Ticci Viracocha という最高神であったとも考えられている [LUMBRERAS, 1964b : p. 120]。現在までのところ、これらを判断する資料は見出されていない。しかし、いずれにせよ art style により表されたものが、宗教的性格を強く持ったものであることは明らかである。そこで、この style の広がりには、単なる文様の伝播ではなくその背後には、それを支えていた宗教的イデオロギーが常に伴っていたと考えてよいであろう。

4. Ayacucho 地域の E.I.P. の状況

Ayacucho 地域は、E.I.P. において中央アンデスにおける後進地域であった。しかし、広範な階段畑、綿密な灌漑水路網を作り上げた後期には、この地域を広く支配していた政治権力機構が成立していたと考えられている。一方、この地域も E.H. から南海岸との関係を持っていた。しかし、その影響は土器に施された文様だけに認められ、それもおよそ宗教的な感じを持たないものである。Ayacucho 地域と南海岸は地理的には近いが、両者の結びつきが何を媒介にしていたのか判断する資料はない。仮に交易によるものとしても、この活動は一つの統一的な組織によるものではなく、小集団による散発的なものであったのであろう。また、Ayacucho 地域は、E.I.P. 終末期までは土器の文様以外の Nazca 文化の要素を受入れるまでの段階に達していなかったとも考えられよう。

5. Tiahuanaco と Ayacucho との関係

この両者の関係は、前述のように E.I.P. 後期にすでに始っていたことが、交易ル

ートの点から推測できる。しかし、当時の Ayacucho は文化的には後進地域であり、ある程度の政治、社会的なまとまりを見せるのは、おそらく E.I.P. 終末期であった。一方、Tiahuanaco でも宗教を背景とした強力な権力が成立するのは、E.I.P. も終りの頃と考えられる。この二つの権力の中、Tiahuanaco の方がその成立は早いかもしれないが、両者がそろった時に M.H. 成立の条件がととのったことになる。その後の両者の関係としては、純粋に宗教を媒介としたもの、交易によるもの、軍事的征服によるものなどが考えられる。M.H. 成立への第一歩は、Conchopata の大型深鉢に始まる。この土器は、表された文様、その特異な出土状態から考えて、何らかの宗教的、儀礼的意味を持っていることを強く示している。そこから、両者のつながりは宗教を媒介としたものであるということがいえるであろう。Menzel はこの土器の文様の伝播を「両地の間を移動した少数の人びとによる純粋に宗教的な活動による」ものとし、「Ayacucho 地域から出ていった人が、新しい宗教を学び持ち帰ったもの」と考え、その理由として、「Conchopata 式土器に表された神像は、Tiahuanaco の石彫文様の完全なコピーではないこと」を挙げている [MENZEL, 1964 : p. 67]。しかし、Ayacucho 地域の人が、はるばると遠く離れた Titicaca 湖の南まで出て行ったという積極的証拠はない。むしろ、前述のように Tiahuanaco と南海岸との間の交易活動の結果による接触と考えたほうがよいと思われる。この場合、文様の違いを解釈する一つの可能性は、Conchopata の文様は石彫文様のコピーではなく、織物からとったという考えである。高地においては残念ながら織物は遺存していないが、Tiahuanaco の石彫の文様が織物を示す可能性は大きいし、海岸地帯からは神像などを表した M.H. の織物が数多く知られている（図7）ことから推測できよう。Tiahuanaco の石彫、特に神像の類は、Tiahuanaco の他には Titicaca 湖南岸のいくつかの遺跡で発見されているにすぎない。そこで、Tiahuanaco の交易集団は、その北上に伴って神を表した織物を持って歩いたか、途中の拠点の神殿に祀っていたということが考えられる。Conchopata の土器は、この織物の文様を見た Ayacucho の人たちが作ったものであったため、石彫文様と異なったものが施されたのであろう。つまり、Tiahuanaco と Ayacucho 両者の関係は、宗教を媒介にしたものではあったが布教、巡礼などという純粋に宗教的な活動の結果ではなく、交易活動を通じてのものであったと考えられる訳である。

以上、M.H. の成立に関った Titicaca 湖周辺と Ayacucho 地域の文化および両者の関係について考えて来たが、本来 M.H. は Huari の影響が中央アンデスに広く現

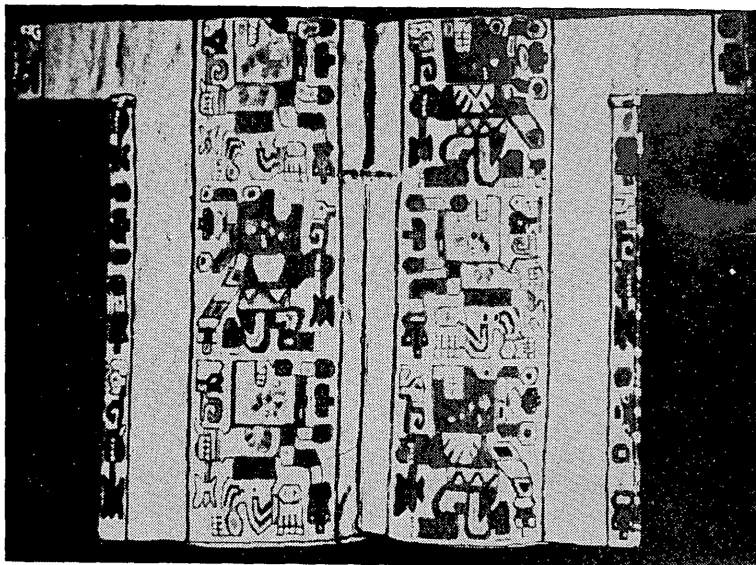


図 7(a) 海岸地帯出土の Middle Horizon の織物
[BENNETT, 1954 : fig. 84] より

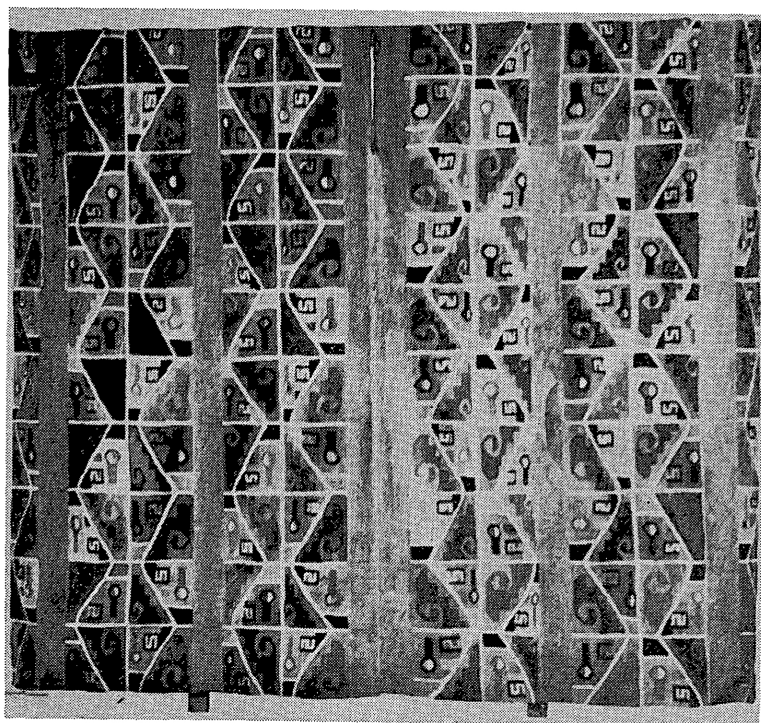


図 7(b) 海岸地帯出土の Middle Horizon の織物
[BENNETT, 1954 : fig. 91] より

れた時に成立したといえるので、本稿はその序論にすぎない。また確実な資料、発掘報告が少ないためかなりの推論を行っており、将来新しい資料が増えれば変わって来ることはもちろんで、あくまでも現時点における仮説構成を試みたものである。

最後になったが、本論をまとめるに当り助言を頂いた国立民族学博物館の石毛直道、松原正毅両助教授、文献を拝借した東京大学文化人類学研究室の加藤泰建助手にお礼を申し述べる。

文 献

- BENNETT, W.C., 1934, "Excavations at Tiahuanaco", *Anthropological Papers*, Vol. 34, American Museum of Natural History, New York.
- , 1936, "Excavations in Bolivia", *Anthropological Papers*, Vol. 35, American Museum of Natural History, New York.
- , 1944, "The North Highland of Peru", *Anthropological Papers*, Vol. 37, American Museum of Natural History, New York.
- , 1948, "A Revised Sequence of the South Titicaca Basin", *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*, Bennett, W.C. (ed), Memoir, No. 4, Society for American Archaeology, Menasha.
- , 1953, *Excavations at Wari, Ayacucho, Peru*, Yale University Publications in Anthropology, No. 49, New Haven.
- , 1954, *Ancient Arts of the Andes*, New York.
- BENNETT, W.C. (ed), 1948, *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*, Memoir No. 4, Society for American Archaeology, Menasha.
- BENNETT, W.C. & J.B. BIRD, 1960, *Andean Culture History*, 2nd ed., American Museum of Natural History, New York.
- CIEZA DE LEÓN, P., 1941 (1553), *Crónica del Perú*, Madrid.
- IBARRA GRASSO, D.E., 1973, *Prehistoria de Bolivia*, 2ª edición, La Paz.
- IZUMI, S. & K. TERADA, 1972, *Excavations at Kotosh, Huanuco, Peru, 1963-1966*, Tokyo.
- KELEMEN, P., 1969, *Medieval American Art*, 3rd Revised Edition, New York.
- KIDDER II, A., 1943, *Some Early Sites in the Northern Lake Titicaca Basin*, Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University, Vol. 27-1, New Haven.
- , 1948, "The Position of Pucara in Titicaca Basin Archaeology", *A Reappraisal of Peruvian Archaeology*, Bennett, W.C. (ed), Memoir, No. 4, Society for American Archaeology, Menasha.
- KROEBER, A.L. & A. GAYTON, 1925, "The Uhle Pottery Collections from Moshe", *Publications in American Archaeology and Ethnology*, Vol. 21, University of California, Berkeley.
- LANNING, E.P., 1967, *Peru before the Incas*, New Jersey.
- MACNEISH, R.S., 1971, "Early Man in the Andes", *New World Archaeology, Readings from Scientific American*, San Francisco.
- MEGGERS, J.B., 1972, *Prehistoric America*, Chicago.
- MENZEL, D., 1958, "Problemas en el Estudio del Horizonte Medio en la Arqueología Peruana", *Revista del Museo Regional de Ica*, Año 9, No. 10, Ica.
- , 1964, "Style and Time in the Middle Horizon", *Nawpa Pacha*, 2, Berkeley.
- , 1969, "New Data on the Huari Empire in Middle Horizon Epoch 2A", *Nawpa Pacha*, 6, Berkeley.
- MENZEL, D., J.H. ROWE & L. DZ DAWSON, 1964, *The Paracas Pottery of Ica, A Study in Style*

- and Time*, Publications in American Archaeology and Ethnology, Vol. 50, University of California, Berkeley.
- MUELLE, J.C. & C. BLAS, 1938, *Muestrario de Arte Peruano Precolombino; Cerámica*, Instituto de Arte Peruano, Museo Nacional, Lima.
- OSBORNE, H., 1968, *South American Mythology*, Middlesex.
- PARSONS, J.J. & W.M. DENEVAN, 1967, "Pre-Colombian Ridged Fields", *Scientific American*, Vol. 217-1, New York.
- PARSONS, J.R., 1968, "An Estimate of Size and Population for Middle Horizon Tiahuanaco, Bolivia", *American Antiquity*, Vol. 33-2, Salt Lake City.
- PONCE SANGINES, C., 1948, *Cerámica Tiwanacota*, Buenos Aires.
- , 1961, *Informe de Labores*, Centro de Investigaciones Arqueológicas en Tiwanaku, Publicación No. 1, Tiwanaku.
- , 1969a, *Descripción Sumaria del Templo Semisubterráneo de Tiwanaku*, 3ª edición revisada, Academia Nacional de Ciencias de Bolivia, Publicación No. 20, La Paz.
- , 1969b, *La Ciudad de Tiwanaku*, La Paz.
- , 1970a, "Breve Resumen de la Historia Cultural Precolombina de Bolivia", *Puma Puncu*, No. 1, Instituto de Cultura Aymara, La Paz.
- , 1970b, *Las Culturas de Wankarani y Chiripa y su Relación con Tiwanaku*, Academia Nacional de Ciencias de Bolivia, Publicación No. 25, La Paz.
- , 1971a, *Procedencia de las Areniscas Utilizadas en el Templo Precolombino de Pumapuncu (Tiwanaku)*, Academia Nacional de Ciencias de Bolivia, Publicación No. 22, La Paz.
- , 1971b, *La Cerámica de la Época I de Tiwanaku*, Academia Nacional de Ciencias de Bolivia, Publicación No. 28, La Paz.
- POSNANSKY, A., 1945, *Tiwanacu, the Cradle of American Man*, New York.
- RAVINES, S., R.H., 1969, "Un Depósito de Ofrenda del Horizonte Medio en la Sierra Central del Perú", *Nawpa Pacha*, 6, Berkeley.
- ROWE, J.H., 1960, "Cultural Unity and Diversification in Peruvian Archaeology", *Men and Culture*, WALLACE, A.F.C. (ed), Philadelphia.
- ROWE, J.H., D. COLLIER & G.R. WILLEY, 1950, "Reconnaissance Notes on the Site of Huari, near Ayacucho, Peru", *American Antiquity*, Vol. 16-2, Salt Lake City.
- RYDÉN, S., 1947, *Archaeological Researches in the Highland of Bolivia*, Göteborg.
- SHAEDEL, R.P., 1948, "Monolithic Sculpture of the Southern Andes", *Archaeology*, Vol. 1, Cambridge.
- 田中正武, 1975, 『栽培植物の起源』日本放送出版協会, 東京。
- TELLO, J.C., 1942, "Origen y Desarrollo de las Civilizaciones Prehistóricas Andinas", *Actas y Trabajos Científicos*, 27th International Congress of Americanists, Lima Session, 1939, Vol. 1, Lima.
- TSCHOPIK, H., 1951, *The Aymara of Chucuito, Peru, I, Magic*, Anthropological Papers, Vol. 44, Pt. 2, American Museum of Natural History, New York.
- UHLE, M., 1903, *Pachacamac*, Department of Archaeology, University of Pennsylvania, Philadelphia.
- WILLEY, G.R., 1971, *An Introduction to American Archaeology*, Vol. 2, South America, New Jersey.
- WILLEY, G.R. & P. PHILLIPS, 1958, *Method and Theory in American Archaeology*, Chicago.